

入学式 告辞

筑後川の堤を菜の花や大根の花が彩り、若草が萌え始める今日のこの佳き日に、ご来賓の皆様のご臨席を仰ぎ、平成30年度久留米工業高等専門学校入学式を挙行できますことは、教職員一同にとって、慶びの極みであります。ご多用中のところ、ご臨席賜りましたご来賓の皆様には、高壇からではございますが、厚く御礼申し上げます。

本科並びに専攻科に入学された皆さん、本科に編入学された留学生の皆さん、ご入学おめでとうございます。難関を突破し、わが久留米高専への入学を果たされた皆さんのこれまでのご努力に心より敬意を表します。

また、本日入学された皆さんをこれまで支えて来られました保護者の皆様のお慶びは如何ばかりかと拝察いたします。重ねてお祝い申し上げます。

久留米高専は、前身の久留米高等工業学校の創設以来80年近く、現在の久留米工業高等専門学校の創立後55年を経しております。入学された皆さんは、その輝かしい歴史と伝統を踏まえて策定された教育理念と教育方針に基づいて学業を進めることとなります。具体的には、高校初年程度から大学工学部卒業レベルまで、すなわち基礎から応用まで周到に練られた一般科目及び各専門科目のプログラムを着実に修得していくこととなります。

「朋遠方より来たる有り、また楽しからずや」。ご承知のように『論語』学而篇第一の一節であります。入学生の皆さん、たくさんの学友とともに、とりわけ寮生においては、文字どおり遠方より来たる学友とともに、身を修め、切磋琢磨して学業に励んでください。

本校の教育理念は、「自立の精神と創造性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成」であります。この「自立の精神」(Spirit of Independence)、「創造性」(Creativity)、「広い視野」(Broad Vision)、「豊かな心」(Humanity)、そして「社会貢献」(Contribution to Society)は、本校がめざすエンジニア育成像を示しています。ここでは、このうち「創造性」について、少しだけお話しいたします。

国立高等専門学校機構の中期目標・中期計画の前文には、「グローバルな視野を持って社会の諸課題に立ち向かう、科学的思考を身につけた実践的・創造的技術者を養成することにより、高等学校や大学とは異なる高等専門学校の本来の魅力を一層高めて行かなければならない」とあります。創造的技術者の育成は国立高等専門学校の教育の至上課題となっているわけであります。しかしながら、この創造性を養う、皆さんからすると創造性を磨くということになるわけですが、これは必ずしも容易ではありません。

iPS細胞の発見で2012年ノーベル生理学・医学賞を受賞された京都大学教授山中伸弥先生と、将棋棋士で、前人未到の「永世七冠」の称号を得て、本年2月国民栄誉賞を受賞された羽生善治さんとの対談集『人間の未来、AIの未来』（講談社）の中で、羽生さんは、

「棋士をずっと続けてきて経験的に知ったことがいくつかあります。前例のない手が指され、それをきっかけに形勢が大きく有利に傾いたとき、その手を「新手」と言います。でも自分が「いい新手を思いついた！」ということがあっても、だいたい他の誰かがすでに思いついている、そう思っただけ

間違いないんです。山中先生の場合は、非常に斬新な発想とアイデアで研究を進めてこられました。他人と違う発想をするためには、どういうことが大切だと思いますか」と問いかけておられます。

これに対して、山中先生は、他の人と違うことをやろうと思ったら、三つのパターンしかないと答えておられます。

一つ目は、「アインシュタインみたいに、もともと天才というパターン」。二つ目は、「実験という手段で自然に問いかけると、まったく意外な反応を示してくれる」、すなわち「実験をしてみて、予想していなかったことが起こったときに、それに食らいつけるかどうか」、「それを「これは面白い」と喜べるかどうか」というパターン。三つ目は、「自分も他人もみんな「これができたら素晴らしい」と考えているんだけど、「無理だろう」とあきらめて、誰もやっていないことに敢えてチャレンジするパターン」であります。山中先生は、その中で二つ目のパターンがいちばん大切だが、iPS細胞は、三つ目のパターンで発見したと述べておられます。

結局、山中先生は、天才でない限り、「過去の知識や経験」、別言すると、「教科書」を十分学んだうえでのことですが、想定外の実験結果から思わぬ真理を発見したり、失敗を恐れず新しいことにチャレンジし続けたりすることによってのみ、「既成概念」を打破し、ブレイクスルーを起こすことができると説いておられるわけです。そして、「何か新しいことを発見して世に問えば、評価されて努力が報われます。場合によっては、その発見によって社会や人類に貢献することだってできるわけです」とも述べておられます。

本日入学された皆さんが、久留米高専において、事実や実験データを大切にすると同時に、たとえそれが予想外のものであってもたじろがず、逆にチャンスだと思う、あるいは自分の「夢」や「志」を簡単には捨てず独自のアイデアの実現に粘り強く挑戦し続ける、そうした姿勢を学ぶことによって「創造性」(Creativity)を育み、将来社会に貢献できる技術者として大きく成長していかれることを心より願って止みません。ご研鑽を期待いたします。

平成30年4月5日

独立行政法人 国立高等専門学校機構
久留米工業高等専門学校長
三川 譲二